

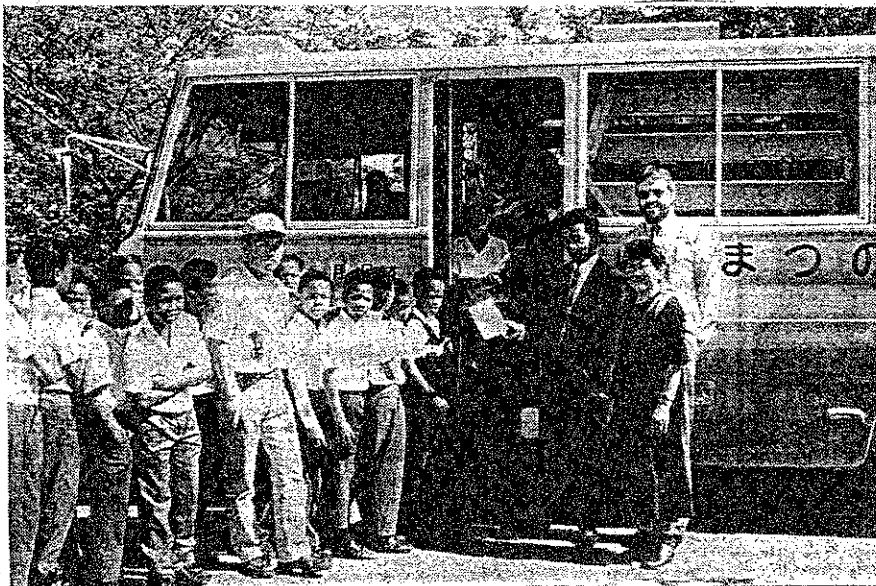
自由の声

1996年度の主な活動計画

- 本や教科書の不足している南アフリカに本を送る。
- 本を有効に利用できるよう移動図書館車を南アフリカに送る。
(現在、2台再整備中。関連記事P5)
- 移動図書館のベースとなる図書館センターを南アに建設する。(関連記事P5)
- 南アフリカにおける移動図書館活動の維持を支援。
- 南アよりスタッフを移動図書館研修のために日本へ招く。

目次

南アフリカの現状と私たちにできること.....	2
排ガス豆ノート.....	4
移動図書館車の受取り先からの手紙.....	5
1年間、被災地の人々をカメラで追いつけて...	6
東神戸朝鮮初中級学校からのご挨拶.....	7
林田製作所.....	8
お知らせ.....	8



南アのデベトン地区の学校で、試験運行中の移動図書館車を見る生徒たち。

南アフリカの現状と

私たちにできること

フリーライター 佐保美恵子

■活気が戻った南アの空の玄関口

昨年9月上旬、「アジア・アフリカと共に歩む会」の野田千香子さん、浅見克則さんの南アフリカ視察旅行に同行した。私自身は雑誌の仕事で7年前から5回現地を訪れているが、今回は1994年4月に黒人初参加の総選挙を取材して以来、1年半ぶりの南アフリカ。初秋の日本を発ち、香港経由で約15時間、早春のジョハネスバーグに到着した。

空港に降り立って、いきなり新制南アフリカを実感。アパルトヘイト時代はルイ・ボタ空港だったのが、すでにジョハネスバーグ空港と改名されていたのだ。ルイ・ボタとは昔の白人大統領の名前。南アフリカでは空港やストリートに、歴代の白人政治家名がよく使われているが、アパルトヘイト時代の名残を感じさせるそうした名前は今後、少しずつ変えられていくようだ。

名前だけではない。マンデラ現大統領が釈放された1990年頃までは、「これが国を代表する国際空港？」と首を傾げたくなるほど、うらぶれた雰囲気だった空港が、航空機の発着所を大幅に増設し、手荷物受取所やロビーなどいたる所で拡張工事が進められていた。人種差別に反対して航空機の乗り入れを拒否していたブラックアフリカの国々が、マンデラ釈放、アパルトヘイト関連法の廃止などを受けて数年前から次々と乗り入れるようになったためだ。新政権誕生後は停滞していたビジネスや観光も徐々に注目を浴び始め、世界から爪弾きにされていたジョハネスバーグ空港に活気が戻り始めていた。

ただ国営南アフリカ航空の機体のイメージカラーが、アパルトヘイト時代の国旗のオレンジ、白、紺のままなことに、一挙にすべてを一新できないこの国の台所事情がうかがえて、滑走路を見ながら思わず納得した私だった。

■新しい時代の兆し

ところで1994年5月、全世界の祝福を受けながら華々しく船出したマンデラ政権だが、それは一方でアパルトヘイト時代のツケを一切合財引受け、しかも黒人たちの絶大な期待を背負うという茨の道の始まりでもあった。

そんな中、マンデラ大統領が政策の核として打ち出したのが、壮大な復興開発計画RDP (Reconstructive and Development Program) だった。RDPのもと5年間で100万戸の低価格住宅の建設、2000年までに250万戸に電気を供給……など、貧困層の底上げに向けた目標計画が次々と提示された。

残念ながらこのRDPについては、視察旅行では大きな進展はあまり感じられなかった。それでもひとつだけ、印象に残ったことがある。スクオッターキャンプ (不法居住区の意味。近郊の黒人居住区や地方から都会に出てきた黒人たちが、空き地に獨り立て小屋をつくって移り住む貧しい居住地域) に、変化の兆しが見え始めているのだ。

視察の終了後、私は仕事で1ヵ月現地に滞在したのだが、その間、司法府のある内陸都市ブルームフォンテインを訪ねた。友人の案内で、近郊のスクオッターキャンプ「フリーダムスクウェア」に行った時のことだ。キャンプの全貌を見渡せる丘に登って、私は思わず目を見張った。トタン、ダンボール、ビニールシートでつくった無数の獨り立て小屋の合間に、電話ボックス型の真新しい水洗トイレがドミノ倒しのように居並び、今までなかった電線がキャンプの上を縦横無尽に走っている。

「この風景は新政権のシンボルだ。昔はスクオッターキャンプといえば夜は真っ暗で、この地域には水道もなく、十数キロ歩いて毎日水汲みに行っていたよ。でもRDPのおかげで、電気と上下水道がひかれたんだ」

友人の説明を聞いて、私は新時代の足音を感じた。ただ全国レベルで見ると、こうした改革は一部の限られた地域で進んでいるだけで、国内全域に広がるまでには相当時間がかかるというのが現状だ。

■難しい改革のプロセス

改革の遅れに苛立ちを募らせている人々も少なくない。ジョハネスバーグ近郊の南アフリカで最も古い黒人居住区アレキサンドラでは、1992年以来、旧市役所に約150世帯の家族が暮らしている。彼らは居住区内の武力抗争で家を追われた住民で、いまだに避難所か

ら身動きが取れないままだ。ここでは電気や水道はあるけれど、トイレは共同。失業者の若者がたむろする広場には、ゴミやビール瓶が散乱し、悪臭が漂う。週末には酔っぱらいが増え、喧嘩や発砲事件も珍しくない。

「役人がやってきては、避難所の現状を視察するけれど口約束ばかり。こんな生活がもう3年以上も続いているんだよ。マンデラ大統領のいうRDPは、一体どこにあるんだい!? 政府は何をぐずぐずしてるんだい!？」

避難所生活を送る女性が、悲痛な声で訴えていた。

南アフリカだけでなく、東西ドイツの統合や旧ソ連の崩壊をみてもわかるが、体制の変化というものは、蓄積された民衆のエネルギーが爆発し、短時間で劇的な展開をみせることが多い。けれどその後に続く経済・社会改革は時間がかかり、目に見えにくく、民主化とは対照的な地味なプロセスで、世界のニュースにもなりにくい。

1990年のマンデラ釈放、その後の武力抗争、1994年の総選挙の頃に比べれば、日本の新聞に南アフリカが登場する頻度もめっきり低くなった。マスコミで仕事をする一人として、そんな現状にディレンマを抱く一方で、南アフリカもいよいよ第二段階の経済・社会改革のプロセスに入った事を実感した。

■現地NGOが直面する資金難

そんな南アフリカで、アパルトヘイトの時代に黒人社会を草の根レベルで支えてきた現地NGO（非政府組織）が、皮肉にも今、冬の時代を迎えている。

インド洋沿いの都市ダーバンに、「アジア・アフリカと共に歩む会」から本や移動図書館車を受取っているNGO「ELET」（English Language Educational Trust）のオフィスを訪ねた時、スタッフの一人ジュリア・ソスキンから気になる話を耳にした。

「1995年7月以降、ELETでは50名のスタッフのうち、8名が解雇されたの。今年早々にも、更に9名が解雇されるという話も…」

「ELET」では教師の再教育や英語教材の開発に取り組んで10年の実績をもつが、資金難で昨年はプロジェクトの一部が中止に追い込まれたという。私たちとのミーティングでも、移動図書館車の運営に関しては、専属の運転手や図書館司書の人件費がネックになっている現状が報告された。

1993年、南アフリカには約54000のNGOがあったといわれ、当時の日本のNGO数の200倍近くに相当した。ところが昨年はELETに限らず、国内有数のNGOがスタッフを大幅にリストラしたり、組織そのものを閉鎖する団体も相次いだ。

その理由にふれる前に、南アフリカのNGOの歴史的な背景を少し説明しておこう。アパルトヘイト政権が黒人たちを武力で弾圧し続けた1980年代、欧米諸国は南アフリカに経済制裁を加える一方、人道的立場からNGOには積極的に資金援助を行った。その財源をもとに彼らは、黒人社会を切り捨てる政府に代わり、教育、医療、農業などの分野で、地域に根ざしたきめの細かい支援活動を続けてきた。黒人の生活を根底から支えることで、NGOはアパルトヘイト打倒の重要な脇役をつとめてきたともいえる。

これまで縁の下のかもちとして頑張ってきた彼らが、なぜ今、資金難に陥っているのか。新政権の誕生を機に、海外からの援助資金の流れが大きく変わったからだ。アパルトヘイトのせいで途切れていた政府間援助のパイプが、南アフリカの国際社会の復帰で公式につながった。マンデラ大統領も就任以来、RDPへの積極的な支援を海外で訴えている。そこで各国はNGOへの資金援助を削減または打ち切り、新政府へのODA（政府開発援助）などに切り換えつつある。

■地域と密着したNGO援助

ところが新政府は行政改革や開発計画の検討に手間取っていて、肝腎のRDPはスムーズに進んでいない。海外からの援助を受けても（あるいは受け取る予定があっても）、それをどの地域でどう使ったらいいのか、十分な情報の把握もできていないのが現状だ。一方、開発実績と地域情報を持ち、地域住民との信頼関係も築いてきたNGOはRDPの逆風を受け、資金不足で身動きがとれなくなっているのだ。

視察旅行の後半、私たちは「ELET」の案内で、ダーバンの北40キロの村マブムロのロイド小・中学校を訪ねた。この学校は「ELET」を通じて「アジア・アフリカと共に歩む会」からの本を受け取り、それを教科書として使っている。でっぴりと太った英語の教師のウィンストン・グマ氏が、授業の合間にこぼしていた。

「学校では教科書が足りず、日本からの本の一部を生徒数だけコピーして急場をしめています。コピー機もないから、近隣の町まで先生がコピーしにいくんです。コピー代も交通費も、先生が安月給から自腹を切って工面しています。政府のいうRDPは今ひとつ実感ももてないけれど、ELETのようなNGOは私たちにはかけがえのない存在。ELETは10年近くこの村に足を運んでくれ、新しい授業法の指導や教科書の支給で、子供たちの教育を支えてくれています。そのNGOが今、経済的に大変だと聞きました。政府はN

GOを見捨てないでほしい。」

■NGOとの協力を模索する南ア政府

改革の遅れに焦る新政府は、最近になってNGO抜きには国の再建は困難だと認識し始めている。NGOとの協力体制を築こうと、昨年10月下旬には暫定的な国家開発財団「TNDT」(Transitional National Development Trust)を発足させた。南アフリカ政府やEUが出資し、運営は学識関係者やNGOネットワークなどの代表委員会に任せる仕組みだという。海外からの経済援助の一部を、TNDTを通じて各地のNGOに振り分け、彼らをバックアップしながら、RDPをより効果的に実施しようという狙いらしい。

但し、それはNGOの財政難がとりざたされ始めて、1年以上たつてからの旗揚げだった。こんなベースから考えても、TNDTが本格的に機能するには、まだまだ時間がかかりそうだ。その間にも行き詰まるNGOが続出する恐れがあるのが気掛かりだ。政府主導の開発に比べれば、確かに個々のNGOの活

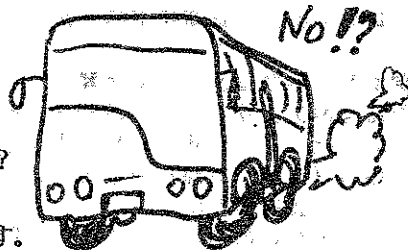
動規模は及びもつかない。けれどアパルトヘイト時代に十分な実績を積んできたNGOの活性化は、南アフリカの将来にとって不可欠な課題となることはまず間違いない。

今回の視察旅行を通じて、私は南アフリカと日本の双方のNGOについて、多くのことを考えさせられた。そのひとつはマンデラ政権になったからといって、南アフリカへの支援は決して不要ではないということ。むしろ南アフリカが名実ともに自由で民主的な国になるには、これからが正念場。だからこそ「アジア・アフリカと共に歩む会」のような支援活動が今後益々求められていくはずだ。

今、「アジア・アフリカと共に歩む会」は車を送っただけに終わらせず、資金面の苦しさや当面している現地NGOの移動図書館の運営面も支援すべく力を注いでいる。「アジア・アフリカと共に歩む会」は発足4年目を迎え、さらに現地の現状とニーズを考慮しながら、南アフリカに移動図書館のベースとなるセンターの設置に新たな展開を見せようとしている。

排出ガス豆ノート

ある方から我々の活動(中古図書館車寄贈プロジェクト)について、排出ガス規制によって廃車した車を贈るのは公害の輸出になり、後日先方からクレームをつけられるのでは...? という忠告を受けました。貴重なご意見ありがとうございます。しかし我々は下のような理由で問題はないと考えています。



①今回の排出ガス規制は、東京、大阪周辺の大都市近郊のみの適用で、それ以外の地域では問題なく車検が取得できます。まして、南アの広大な地域を巡回する図書館車にとって、排出ガスが問題になるほどの車が過密な地域には行きません。

②10年間使用された図書館車は、常に本を掲載していた為に、足回りは痛んでいますが、通常は所属市内、多くの場合10数Km/1日の走行しかいたしませんので、走行距離は2~3万km、多くとも5~6万kmですので、エンジンの痛みは少ないといえます。(従って急激に排出ガスが汚くなることも考えにくい)

③上記の2点に加えて、我々は輸出整備(中古新規検査に匹敵する分解整備)を施し、万全を期しています。

④少々専門的になりますが、直噴ディーゼルエンジンはパワーがありますが、排出ガスが汚れやすくなるというデメリットがあります。しかし、それほど大排気量の直噴エンジンを搭載している図書館車は少なく、主に副燃焼室エンジンが採用されているようですので、現在でも他のディーゼル車両に比べてクリーンな排出ガスをキープしていると思われます。

(浅見克則)

移動図書館車の受取り先からの手紙

表紙の写真にもあるデイトン小中学校をベースにMethodist Education Initiative (MEI) は、移動図書館活動を始めようとしています。MEIの代表デイビッド・ベントレイ氏からの手紙をご紹介します。移動図書館を軌道にのせるための一步一步の努力が南アフリカと私たち日本側の協力でなされている過程の一端をご覧いただけるのではないのでしょうか。

1996年1月9日

千香子様

グッドニュースです。2台目の移動図書館車に対する輸入許可が処理されました。そちらのファイル用として輸入許可書のコピーを添付します。

移動図書館プロジェクトに関しては、私たちは2,3週間後にGauteng教育省と会談を持ち次の提案を出してみるつもりです。

- ・MEIはGauteng教育省との共同事業として移動図書館を運営していきたいと思う。
- ・MEIが移動図書館を提供し、Dube先生の学校に移動図書館の運営拠点となる図書館を建設するのに必要な資金を集める。
- ・教育省側は、2人の図書館員を提供し、彼らに給料を支払う。これらの図書館員は、移動図書館で働くことになるが、Dube先生のスタッフのメンバーとなる。
- ・移動図書館にかかるその他の運営コストはMEIあるいは教育省のどちらかが支払うことになる。

私達はこの提案が受諾される可能性は高いと思っています。もしそうなったら、私達は直ちに、Dube先生の学校の図書館用の本を準備する作業（目録作り、貸出記録など）に取りかかることができます。TAAA側が図書館建設のための一部資金を提供できるとおっしゃったので、私は教育省との会談が済み次第その結果をお知らせします。

とにかく、私達はこの共同事業の案にとても興奮しています。また、私達は近々、貴団から送られてきた教科書を学校に分配する会

合を持つ予定です。学校は12月4日から休みに入っていて明日やっと始まります。夏休みで先生達がいなかったのも、今まで学校に本を送ることはできませんでした。

つい最近、年次卒業試験の結果が出ました。ベノニの「白人学校」の合格率が99%だったのに対し、デイトンの「黒人学校」の合格率は21%でした。この結果は、ここに教育省があるとはいえ、ベノニのすべての住民に対し平等な教育が存在するようになるまで、まだやるべき仕事がたくさんあることを如実に表しています。

今までに送ってくださった素敵な本、どうもありがとう。ところで、4月に私は、妻のGillと子供と休暇でアメリカに行きますのでその間、ここで本を受け取ることはできません。ですので、2月15日から5月1日の間は本を送らないでください。さもないと私は多額の倉庫料(100カートン分、1日につき60ランド)を支払うはめになってしまいます。

Margaret Webberと私は、Springs用の移動図書館の輸入が許可されたことに対し、たいへん喜んでます。

貴団側は、今ならいつでもその図書館車の発送準備ができます。

日本にいるすべての友人に、「1996年が良い年となりますように」。

デイヴより

1年間、 被災地の人々をカメラで追い続けて

写真家 奥野安彦

■おばちゃんが泣いた『そして神戸』

1995年大晦日の夜、ぼくは神戸市長田区にある長田神社にいた。特設賽銭箱の脇に立ち腕時計を見ると時刻は11時50分。あと10分で新年を迎える。すでに紅白歌合戦も終わり、大勢の人々が参拝に集まり始めていた。

隣にいた50歳ほどのおばちゃんが、カメラをもった僕と目が合うなり尋ねてきた。

「にちゃん、新聞(社)の人?」

「いや、雑誌の取材で来てるんよ」

僕が答えると、おばちゃんは言った。

「そう、大晦日やのに大変やねえ。さっきのなあ、紅白歌合戦の前川清の『そして神戸』には泣いたでえ」

♪神戸、泣いてどうなるのか

捨てられたわが身が

みじめになるだけ

神戸、船の灯うつす

濁り水の中に

靴を投げ落とす

そしてひとつが終わり

そしてひとつが生まれ

夢のつづき見せてくれる

相手探すのよ♪

『そして神戸』の歌詞を思い浮かべているぼくの横で、おばちゃんは続けた。

「来年こそは、神戸ももっとよくなるやろ。そうやろ!？」

同意を求めるように言った最後の言葉が、耳の奥で何度も反響する。

「そうなるとええなあ」

反射的にそう答えながらも、僕は心の中で少し悲観的な気分になっていた。

1996年0時。参拝客は押し合いながら、一斉にお賽銭を投げ入れる。白い息と熱気に包まれて、人々はしばし目を閉じ、拍手を打ち、静かな祈りを捧げていた。

■被災地神戸に通う日々

1995年1月17日、朝のNHKニュースで僕は初めて地震直後の神戸の映像を見た。えら

いことが起きた! そう思うとすぐにライターの土方正志に電話をかけ、神戸に行く準備を始めた。神戸行きにはこれっぽちの戸惑いもなかった。僕自身、土方とともに島原や奥尻の被災地を取材してきて、写真を撮る者として、一刻も早く現場に飛んでいかなければと本能的に思ったのだ。そして何よりも神戸は、生まれ故郷の大阪と目と鼻の先。子供の頃や学生時代によく出掛け、思い出が詰まった土地でもある。

新幹線でなんとか名古屋まで行き、近鉄に乗り継いで、その日の夜には大阪にたどり着いた。ラジオやテレビのニュースによると、被害状況は予想以上に拡大し、大阪—神戸間の道路はどれも大渋滞で進めないという。

車ではらちがあかないので自転車を2台手配し、翌朝6時半に大阪市内の実家を出発。国道43号線を北上し、神戸へ向かった。武庫川を越えた辺りから、建物の倒壊が目立ち始めた。西宮市では高速道路がスッポリ抜け落ちていて、その下敷きになった車が大破している。シートは血がべったりとへばりついている。僕はシャッターを押しまくった。

進めば進むほど被害は酷くなる。けれど僕自身は、シャッターを押す頻度が次第に少なくなっていた。頭の中が混乱し、何を撮ればいいのかわからない。ペダルをこぐ足を止めると、倒壊した建物の道路脇に毛布にくるまった死体が置かれていた。日本の大都市、しかも生まれ故郷から程近い大都市の惨状に茫然とするばかりで、もう死体にレンズを向ける気にもならなかった。

自転車を止め、僕たちはしばらく歩いた。ラジオが伝える犠牲者の数、ひっくりかえった高速道路、倒壊した家々、焼け跡の鼻をつく臭い、避難所に向かう人々の群れ……。

「こんな修羅場で写真なんか撮っていいの……!？」

ライターの土方も、ずっとおし黙ったままだ。二人の上には、何か息詰まるような重苦しさだけがのしかかっていた。

「でもやっぱり……、見ておかなくてはいけない。人々の顔をしっかりと見つめ、記憶しておかなければ、僕たちは時間とともにきつ

東神戸朝鮮初中級学校からごあいさつ

悪夢のような「阪神大震災」からすでに11ヵ月が過ぎました。この間被災した本校の教職員、生徒たちは皆様方の暖かい励ましとご支援に勇気づけられ、おかげさまで仮設校舎ではありますが正常な学校生活を営んでおります。

去る11月12日、私達は学校建設のための学父母、学生、卒業生、同胞たちの決起集会を開き50余名の人たちによる新校舎建設委員会を発足させ新校舎建設に立ち上がりました。

被災を受けた東神戸朝鮮初中級学校に対し多大なる心のこもったご支援をお寄せ下さいました皆様方に、復興再生への第一歩を力強く踏み出したことをお伝えすると共に、皆様方のご好意に深く感謝いたします。

この度、建設する新校舎は鉄筋3階建て、総建築面積878坪、総工費約9億円の立派な新校舎として1996年2月着工、1997年2月完工を予定しております。

3階は体育館としてバスケット、バレーボール競技ができ、又800余席を持つ集会場にも活用できるように設計されております。

私たち建設委員は、多難で膨大な事業ではありますが、広範な同胞の力を結集し、震災前より、より立派な校舎を建てる決意を新たにしております。

今後とも、暖かい励ましとご支援のほどを申し上げると共に、皆様方のご健勝を心からお祈りいたします。

1995年12月15日

東神戸朝鮮初中級学校 新校舎建設委員会
名誉委員長 妻 哲
委員長 盧 光 来

と忘れてしまう」

そう思い直すと、僕は再びシャッターを押した。

震災後、1ヵ月間はほとんど神戸と淡路島に通い、被災者の姿を撮り続けた。その間、何度もフィルムを東京に持ちかえり、雑誌で報告もした。3月、4月になると、今までプリントしたフィルムを被災地に持参し、雑誌の仕事の合間に撮影した人々を訪ねては彼らに手渡した。一体いつになれば瓦礫が片づくのか。神戸は、数ヵ月たっても荒廃したままだった。

被災地のとんかつ屋

6月になって、2月4日に撮影した須磨区在住の元木常信さんお千歳湯を訪ねた。周辺の瓦礫は随分片づいていた。4ヵ月前、無残に焼け果てていた千歳湯の近くまで来ると、「営業中」と書いた赤い登り旗が立っている。外壁と煙突しか残っていなかったあの銭湯がなんと、とんかつ屋に生まれ変わっていたのだ！僕は唖然として、とんかつ屋の前で立ち尽くしていた。

しばらくして中に入ると、常信さんのお母さんと妹さんが迎えてくれた。「震災後の神戸でやるなら食べ物屋しかない」という子供たちの提案で、タイルの浴場を調理場とカウンターに改造し、雨風を凌ぐ程度に屋根をつけ、5月17日に開店したそうだ。名前がまた泣かせる。その名も『フローレス・ブー』。

「風呂(フロ)がなくなって(レス)、とんかつ(ブー)屋になりましたという意味だ」と、元木さん親子が笑いながら話してくれた。

彼女たちの笑顔を見ていると、ゼロから立ち上がって生きていこうとする元木さん一家のエネルギーに、こちらの方が勇気づけられる気がした。僕自身、撮影の疲れが溜り、写真を撮る気力が少し萎えていた時期だっただけに、「やっぱり被災地の人々の現状を記録しなければ！」とカツを入れられた再会だった。

被災地の現実には僕たち自身の現実

しかしオウム事件をきっかけに、被災地のニュースはめっきり減り、報道されることといえば電車の開通や仮設住宅の状況等、随分限定されていったように記憶している。

夏が過ぎ、瓦礫が片付けられ、さら地とな利、被災地でもプレハブの建物が建ち始めた。地震直後の状況を振り返れば、目に見える風景は良くなったかもしれない。が、地元の人々からは、年の瀬が近づくとつれて後ろ向き

の声が上がってくる一方だった。

「神戸の復興は10年かかるなあ」

「仮設住宅で自殺者が増えているで」

「アル中がふえてきているで」

被災者の将来への不安、心のケアの問題……。マスコミに登場する「復興」の二文字の裏で、被災地が抱える問題はまだまだ始まったば

かりだ。一年後ということで、被災地の報道は一時的に盛り上がりつつも、1月17日を境にテレビ、新聞、雑誌は次第に震災のことを取り上げなくなるだろう。それでも人々の仮設住宅暮らしは延々と続き、問題は解決の糸口をみないまま山積みされていく。

大晦日に会ったあのおぼちゃんの言葉が今でも僕の耳から離れない。

「来年こそは、神戸ももっとよくなるやろ。そうやろ!？」

僕たちの記憶から阪神大震災のことが薄れていったとしても、被災地の人々の姿は今も決して他人事ではないのだ。明日の自分たち自身の姿なのである。僕たちは、そんな国にすんでいるのだから。

林田製作所

移動図書館車プロジェクトのキーポイントとなる特装車の林田製作所さんをご紹介します。

埼玉県大宮市の郊外、上山口の牧歌的な雰囲気のある川端にゆったりと数棟の工場棟と事務棟が陽を浴びて建っています。

大学自動車部O. B.の林田社長を始め、今は退職された岡田さん、その他の人々もいつもニコニコと私たちを迎えてくれます。特装車の中でも特に限定された図書館車を主体に埼玉県内はもとより全国にそのシェアを誇ります。当会は既に3台の車をいただきました。そのうち2台は南アフリカで稼働体制に入り、残りの1台も現在整備を終わり船出を待っているところです。皆さんも町で図書館車を見かけたらバッテリーの蓋のところを見てください、ハヤシダマークが見つかるはずですよ。(浅見記)

お知らせ

★大勢の方々から本の寄付をいただいているおかげで、1月11日に、5342冊(90箱)と通学カバン879個(数量不明から計)を南アフリカのダーバンに向けて出荷しました。この中には厚い百科事典類が128冊入っています。

★「NGOに苦しい低金利、ボランティア貯金利子配分が半減、懸命に節約策」これは1月6日の朝日新聞の見出しです。96年度の助成金の総額が減るわけですから私たちも今まで以上に資金集めには努力していかなければなりません。南アでの移動図書館活動がスムーズに稼働していくよう現地の人たちと協力してできる限りのことをしていきたいと思っています。

★英語の本と寄付金(郵便振替)はいつでも大歓迎です。会報に振込用紙が入っているとありますが、これは振込みをされる場合になさりやすいようにということで、決して強制ではありませんのでよろしく願いたします。

★本を送って下さる場合、どうか手紙やお金は一緒に入れられないよう、願いたします。手紙やお金はぜひ別便でお送り下さるよう、よろしく願いたします。一日に何十箱も届く場合などは、すぐ開けることができずに倉庫へ一旦運びますので。

南アフリカ 自由の声 第10号

1996年1月20日発行

発行所 アジア・アフリカと共に歩む会

〒338 埼玉県与野市大戸5-17-1 野田方

Tel 048-832-8271

郵便振替:「アジア・アフリカと共に歩む会」00100-4-608515 Fax 048-832-3607